神戸新聞　2017年(平成29年)7月9日(日)朝刊　29面

播磨びと

播磨の酒 次代を見据え

壺坂酒造杜氏

壺坂(つぼさか)　良昭(よしあき)さん(41)

姫路市夢前町前之庄

「1回目（の金賞）はまぐれ、2回目はたまたま。3回目で初めて本物だと思います」。5月の「全国新酒鑑評会」で、3年ぶり2度目の金賞を受賞した。鑑評会に初参加した2007年から仕込みの腕と評判を着実に上げてきたが、満足する様子は見せない。

「雪彦山」の銘柄で知られる壺坂酒造（姫路市）は創業約350年。ここで杜氏(とじ)を務めて今年で20年目になる。蔵は設備が古く、温度を調節する機器がない。蔵の扉の開閉、タンクのウレタンシートの着脱など地道な作業が頼りだ。

東京農業大を卒業して里帰りし、いきなり杜氏になった。「大学の実験でもできた。何とかなる」。そんな安易な思いは1年目で打ち砕かれた。できた酒は苦みばかりが強く「衝撃的においしくなかった」。それでも失敗から目をそらさず、10年間は自戒の念を込め、その酒をちびちび飲み続けた。

同じ姫路酒造組合に所属する他社の先輩の助言に救われた。酒米の運び方を教わったり、タンクの中の発酵の様子を見せてくれたり。10年前に鑑評会に出品したのも先輩たちの勧めがあったからだった。「なんだかんだ言いながら、結局は出すのが怖かった」という不安を振り切っての参加だった。

今回の受賞に際して「小さな蔵でも頑張れば報われるんですね」と祝福してくれた他社の後輩の声が胸に染みた。若手杜氏のリーダー格として播磨の酒を盛り上げる。「先輩たちが期待してくれたのは、こういうことかな」と今は思う。　（山崎　竜）